

第四十七章 クリーム半島陥落

首都キープを出発して一時間たらずで特急ウク・ライナーはクリーム半島の最初の駅に到着した。今のところソシア軍の抵抗はない。用心して駅を出るがしばらく徐行する。高くはないが山越えになる。広い線路敷きを確保できないのでここからは複線だった線路が分かれて離ればなれになる。特急ウク・ライナーは一気に登り切ると目の前にパノラマが広がる。遙か遠くで再び線路が近づき複線となってブラックスター艦隊司令部がある都市に向う。

遠く右側下方に黒い列車がこちら方向に近づいている。

「あれは？」

運転室にはウクライナー女性兵士が入室している。本人は否定するが女性兵士のリーダーである。

「ブラックスター・ライナー。ソシアの軍事特急です。全車両にミサイルを搭載している恐ろしい特急です」

「どんなミサイルを？」

「通常はICBMですが今回は恐らく多段装ミサイルか巡航ミサイル、あるいはその両方かも知れません」

イリは力強い発言に感心する。リーダーがモニターを見て叫ぶ。

「あつ、ミサイル！」

リーダーが運転室を出ようとする。

「どこへ行くの？」

「迎撃に！」

「無理！ 私に任せて」

イリが虚勢を張るがそのとき武装車両の大砲が火を噴く。イリはモニターで状況を確認すると発射された光線が宇宙戦艦の主砲と同じ光線だと確信する。

「単なる大砲じゃない。拡散レーザー砲よ」

すべてのミサイルが投げ網のように拡散するレーザー光線網に引つかかる。数本のミサイルが拡散レーザー光線網をくぐり抜けて特急ウク・ライナーに向かってくる。次の瞬間パルスレーザー砲で処分される。イリは武装車両にパルスレーザー砲まで積まれていることに驚くが、ドア付近にいたリーダーがイリの真横に戻ってくる。

「すごい！ 女王と崇められるワケがよく分かりました」

リーダーはヒザマズ跪くとイリの手を取ってキスをする。しかし、イリは長老に榊を運転席まで来るように命じる。榊が現れると詰問する。

『『ノロの道具を使うな』だって、どういうこと？ この特急には宇宙戦艦と同じ武器が積み

込まれているじゃないの！」

しかし、女性兵士には関係のないこと。彼女たちは誓う。

「女王の元、私たちは死ぬ覚悟で戦います。どんな命令でも実行します。ウクライナーに栄光あれ！」

叱責を免れた榊はリーダーに頭を下げる。

*

特急ブラックスワン・ライナーの武装車両はすべて無蓋車となつてよろめきながら走る。やがて脱線して停止する。それを見たイリが現状を分析する。

「このクリーム本線の上りは不通になるわ。と言うことはソシア兵はクリーム半島から脱出するルートの一つを失うことになる」

ウクライナー女性兵のリーダーが頷くとイリが付け加える。

「ブラックシー艦隊は海獣パンダの攻撃でほぼ壊滅状態。艦隊基地に戦闘能力はほとんどありません。空軍基地が残っていますが燃料補給路の一つは使用不可能になりました。あと一つある補給路はクリーム大橋です」

「ウクライナー軍の攻撃で橋が破壊されたと聞いていますが」

「それは過去の話。今は復旧しています」

リーダーの表情が暗くなる。イリは路線図を確認する。次の駅に分岐点があつて三番ホーム

に入線すればクリーム大橋への本線に入ることになる。

「ブラックスー艦隊基地やその周辺の施設にはクリーム半島を維持する支配するだけの兵力や武器弾薬や食糧はありません。だからクリーム大橋を渡ってソシア本土に攻撃を仕掛けます」

リーダーはイリの指示に感心するが同時に不安を抱く。何故なら特急ウク・ライナーには武装車両が一両しか連結されていないし同乗する女性兵士は正規軍ではなく素人集団だから。つまり本格的に訓練された兵士ではないから当然ウィークポイントはある。イリはそれを見越して勇気を与える。

「心配は要りません。勝ち逃げするのです。ただ逃げ込む方向がソシア本土だということですよ」
「どういうことですか？」

「クリーム半島での戦いに敗れてクリーム大橋に逃げ込んだと言うことにします」

彼女たちからすればイリは百戦錬磨の女王なのだ。

「そういうシナリオにすればブラックスー艦隊司令部の司令官は国防相に報告しやすいし、国防相から報告を受けたプレンコン大統領も大喜びするでしょう」

運転室のイリと女性兵士のリーダーが笑みを浮かべると開いていたドア近くの女性兵士にも作戦内容が伝わり笑みがさらに広がる。運転室のある先頭車両、つまり一号車の後部で車掌が領いているのに気付く者はいない。